

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.55（2018年8－9月号）◆

記録的とも言える酷暑の夏となりましたが皆様いかがお過ごしでしょうか。今年度発行の『Intelligence』第18号をご高覧いただき、ご感想はいかがでしたでしょうか。早くも次号となる19号の投稿原稿締め切りも9月末に近づきました。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【**ブログ用エッセイ募集**】会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。前回のニュースレター送信後、第26回の村山龍さんの「検閲官・佐伯郁郎旧蔵資料との邂逅」までネットでご覧頂けるようになっています。いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさいたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【**第120回研究会**】（7月21日（土）午後2時30分～5時30分）

・光石亜由美（奈良大学）「カストリ雑誌『獵奇』と北川千代三「H大佐夫人」」

占領期におけるカストリ雑誌に対する刑法175条（わいせつ物頒布等の罪）の適用例として知られる北川千代三「H大佐夫人」について、掲載誌『獵奇』の沿革、北川の経歴、「H大佐夫人」の表象分析などを通じてその実態が明らかにされた。

・志村三代子（都留文科大学准教授）「冷戦時代の「日米合作映画」 —『東京暗黒街 竹の家』（1955）を中心に—」

本報告では、GHQ占領終了後の日本で長期ロケを行ったサミュエル・フラー監督『東京暗黒街 竹の家』（1955）の成り立ちと表象分析が行われた。山口淑子（李香蘭）映画の表象の引用関係や、高度経済成長期に入ろうとする時期の都市空間表象、「日米合作映画」概念の内実などをめぐり議論が交わされた。

・「**第一次世界大戦期のアフリカ・アジアにおけるドイツのプロパガンダ**」 マハン・マーフィー（京都大学大学院法学研究科 JSPS 外国人特別研究員）

第一次大戦中、アフリカとアジアのドイツ植民地において約3万人のドイツ民間人・軍人がイギリス、フランス、日本の占領軍によって捕らえられ、強制収監・退去させられた。このことは、世界を文明化しようというヨーロッパ人共通の責務を根幹から揺るがした。本報告は、著書"Colonial Captivity during the First World War: Internment and the Fall of the German Empire, 1914-19" (Cambridge University Press, 2017)の一部として、ドイツ政府が帰国した戦争捕虜からどのように情報を収集し、この情報を国内外の世論に影響させるため、どのようにそれを活用しようとしたかを紹介した。ドイツ政府は、外に対しては、野蛮、非人道性を主張し、特にドイツ人宣教師たちがイギリスを世界大戦へと変質させていった発端を作った元凶として糾弾することに、大きな役割を果たした。また内においてはプロパガンダ戦争のために、本国に送還されたドイツ人捕虜や非戦闘員の収監者たちから情報収集を行い、「植民地の記録」として人々に記憶されることとなった。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●第121回20世紀メディア研究会は9月22日（土）午後2時半より、早稲田大学早稲田キャンパス7号館203号室にて開催されます。仁井田千絵（早稲田大学非常勤講師・招聘研究員）「メディアの音響空間をめぐるローカル／ナショナルの様相——戦前の映画とラジ

オの関係から」、賀茂道子（名城大学非常勤講師）「資料紹介：占領期ラジオ番組「真相はこうだ」第1回、第2回」、大原祐治（千葉大学文学部）、「占領期における地方雑誌と文学者―群馬県の事例を中心に―」が予定されています。

研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

### 【ASAA2018に参加して】

7月3日から5日までシドニー大学で開催された ASAA(Asian Studies Association of Australia)に参加し、The Significance of Overseas Experiences to Ariyoshi Sawako's Literature のタイトルで発表した。このところ冷戦期における日本文学の国際化をテーマに、とくにロックフェラー財団の助成を受けて留学した文学者についての調査を進めているので、その一環である。財団の日本文学招聘プログラムを受けた人物としては江藤淳がよく知られている。小島信夫、安岡章太郎、阿川弘之などいわゆる「第三の新人」のほか、有吉佐和子、石井桃子も助成を受けた。日本側の選考担当は坂西志保である。梅森直之氏が『Intelligence』14号に「ロックフェラー財団と文学者たち：冷戦下における日米文化交流の諸相」の表題で論文を寄稿されたこともある。江藤淳の留学体験は対米自立の理論化を促し、GHQ 占領期の検閲に対する関心を呼び起こした。これに対して有吉佐和子は、留学後に黒人兵と結婚して海を渡った戦争花嫁の物語「非色」や、プエルト・リコへのフィールドワークを行う米国の女子大生と留学生との物語「ぶえるとりこ日記」を著す。つまり有吉の留学体験は彼女に冷戦期のポストコロニアルな状況への関心、フェミニズムへの開眼をもたらしたのである。

Asian Studies という枠組みのなかで、東南アジアで書かれているミステリを考察する報告者などと一緒にパネルとなり、子どもの頃に読みふけた世界文学全集のカノンには含まれていない現代の世界文学の多様性について考えさせられた。

[9月5日付 文責：川崎賢子]